

## 2014年度の若手研究者育成プロジェクトを終えて

前学校教育高度化センター・助教  
現東京学芸大学教育学部専任講師  
伊藤 秀樹

今回のスウェーデン研修では、私は発表を免除してもらったため、じっくりと大学院生・学部生の発表を聞くことができた。英語での発表どころか、海外に行くことすら初めての発表者もいた中、東大の大学院生・学部生の報告内容の質は総じて高かったと思う。ただ、プレゼンテーションの方法については、まだまだ改善の余地があるようにも思える。

私が気づいた課題は以下の5つである。①異なるバックグラウンドの聴衆が意義を理解しやすい導入にする、②たまには手元の原稿から目を離し、聴衆の反応を見ながら話をする、③「間」と「強調」を効果的に使う、④事前に発表原稿を作り、練習を重ねる、⑤スライドに文字を詰めすぎない。考えてみると、すべて、かつての自分も海外での発表の中で失敗してきたことだった。これらは、多くの人がつまずくポイントなのかもしれない。

私もそうだったが、初めての発表や2回目、3回目の海外での発表で、うまくいかないのは当たり前である。今回の反省点や悔しさを糧にして、ぜひまた海外での発表にチャレンジしてほしいと思う。異なる文化の人々と日本の学校教育や教育研究について議論を交わすことで、日本人同士の議論では生まれない気づきをたくさん得ることができるはずだからである。

今回のストックホルム研修では、発表以外にも、学校見学、現地学生との交流など、思い出に残ることは多々あったと思う。今回のストックホルム研修がみなさんの研究や人生の幅を広げる機会になることを、心から願っている。